
イリア

DEG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イリア

【コード】

N8866H

【作者名】

DEG

【あらすじ】

雪山に眠る魔女。三百年もの間、彼女は待っていた……

(前書き)

小説というより、ネタの書きなぐりに近いです。既視感の強い話
でしかも拙作の中に似たような話がありますが……好きな話です。

雪山は激しい吹雪に見舞われていた。人を寄せ付けない暗い曇り空と幻すら覆い隠す雪の残像は、旅人をゆっくりと闇の世界へ誘うかのようであった。

「ハア……ハア……」

彼が吐く息すらも自然の脅威に掻き消され、もはや死の行軍となったその足取りは、いよいよ白い大地に倒れ込んだ。

「……人が、倒れた」

雪に閉ざされているはずのどこかにある空間で、そう呟かれた。それに答えるように、まるで人ならざるようなゆらりと響く声があった。

「連れて参りますか」

「ああ、頼む」

最初につぶやいた女性の声が再び言付けると、影を揺らすこともなく何かの気配がそこから消えていった。

そうして彼女は目を閉じた。ただ何かを待つように、そうするに
としかできないように、静かに。

……

「……………」

彼が目覚めると最初に見えたのは、暖かい天国の日でも悍ましい地獄の炎でもなかった。

見覚えのない灰色の石天井。どこか湿った冷たい空気。しかし体は温かい。

「お目覚めですか？」

「……？」

彼の近くから男性らしき声がした。やや老けた印象のあるその声の方を、ベッドに寝かされている彼はぼんやりと振り向いた。

「……幽霊ですか？」

「左様、幽霊です。よくおわかりになりましたな」

彼の目の前に、もとは服だったと思われる水色のボロを被った黒い影が浮いていた。否、影というには何か形があるようで、しかしその身は薄く透けているという、老いた男声の主はまさしく幽霊の様相を呈していた。

「ではここはつまり、地獄というわけですか？」

「いいえ。違うとなき現世にございます。その証拠に、こちらを「
覧下され」

幽霊は、その黒い体の中からニユツと茶色い枯れ枝のような手を出した。そしてその干からびた腕（関節がないようだったが）を近くの机に伸ばし、器の置かれた盆を手にとると枕元へ持ってきた。

その湯気を立てる温かいスープを見た瞬間、彼はベッドからとび起きた。

「いただきますよ？」

「どうぞ」

了承を得るが早いか、空腹の限界を超えていた彼はスープを煽るように飲み、横に沿ってあった乾燥したパンをむせるのも構わず食った。普通ならばこの状況は怪しいの一言に尽きるのだが、そんな懸念を浮かべることもなく彼は一気に最後のパン片まで飲み込んだのだった。

「ぶはっ！ あーいやあ、助かりました。もうすっかり死を覚悟してたんですけど」

「命あって何よりです。私を見ても驚かれませんでした。旅のお方で？」

幽霊の尤もな問いにも取り合わず、彼は嬉しそうに答えた。

「はい、オレ旅人のレナっついていいですよ！ 女の人みたいな名前ですよ？」

まだ二十代半ばを思わせる青年は、頭を掻きながらへらっと笑みを見せた。

「隣の国まで山越えしようとしたら、どうも迷っちゃったらしくて……やっぱりコンパス忘れたのはイタかったかなあ。おっと、あなた幽霊さんですよ？ お名前はなんと？」

「ええ、私めはジミと申しまして……何と申しますか、本当に肝が据わってらっしゃるといいますか？」

「やあ、なにせ旅人ですから珍しいものはあらかた知ってるんですよ！ あ、幽霊見たのは初めてですけどね？」

旅人レナの軽い雰囲気、ボロから覗かせたジミの怪しげな瞳も呆れたようであった。

「まあ、その様子ならばあの方もお話に困らぬことでしょう」

「あの方？ あ、もしかここは名のある貴族の……住居跡か何か？」

「いえいえ……そのようなありがたいものではございませんよ」

ジミは苦笑しつつ、霊体から生えた人のそれではない手をフルフルと振って見せた。

「ここは牢獄でございます。ある方を封じ込めるための……」

.....

起き上がったレナはフワフワと不気味に浮かぶ幽霊に連れられ、ベッドの部屋を出た。そこはジミの言うとおり牢獄のようなカビ臭い空気に満たされており、廊下を歩くといくつもの崩れた小部屋が見えた。そのどこにも、ジミの照らす小さなポロランプ以外、この建物の中には生きた生物の気配は一切なかった。

「へぶしゅっ！……やっぱり幽霊って寒くないんですか？」

「申し訳ありません、火を焚けるのはあの部屋だけでして……」

旅用のマントを着込んだレナは震えながら、気温だけではない不自然な冷たさに包まれた牢獄の階段を進んでいった。まるでその奥に人外の何かが潜んでいるかのような、人を拒む悪寒をレナは感じた。

「まさかオレが生贄とかじゃないですよ？ いや、命の恩人ですから逆らいやしませんけども」

「さて、生贄でなんとかなればよいのですがね。ご心配なく」

そして二人は、一本の狭い廊下の先にある扉の前で止まった。

「先に申し上げておきますが、この部屋には一步も立ち入らぬよう願います。この手前の場所でお話し下さい」

「はい？」

なんのことがレナが得心のいかないまま、ジミは厳かに扉を開いた。

「イリア様、先程の旅人でございます。御目覚め下さい」

扉の先にいたのは、椅子に眠るように腰掛けた女性であった。

「……」

イリアと呼ばれた女性は魔性染みた青色の長髪をだらりと持ち上げ、無言のまま顔を扉の方向にやった。その眼は鋭く見通すようでもあり、異常なまでに無表情にも見えた。

その動作と外見はまさしく人間のものではあつたが、ただ不思議なのはそこが“部屋”と呼べるような空間ではなかつたことだ。壁も天井も床すらも見えない、何かもやもやとした白いものが無限の空間を創っているような中に彼女は座っていた。

「……レナ殿、この方は我が主の」

「ツツフオオオオオオオウ！！」

扉の前からその主をぼんやり見ていたレナが突然、奇声を上げた。あまりの唐突さに、幽霊とその主でさえビクリと身を震わせた。

「ななな何という美しさ！ オ、オレ、十何年世界を旅して色々なもの目にしてきましたけど、こここん、こんなっ」

「お、落ち着いて下されレナ殿！」

「ていうか、ていうか、ああそうだった！」

いきなりあわてふためき扉の先を指差すレナは、ハツとしてその人物に向き直った。

「ス、スリーサイズ教えて下さいっ！」

『バキツッ!』と景気の良い殴打音が鳴ったのは、レナが言い切った直後であった。

……

「はい、すみません……いや幽霊でも殴れるもんなんだなあ……
なんでもないです」

幽霊から煩惱退散の一撃をもらったレナは、コブを作ったまま改めて扉の向こうの人物と対面した。

「コホン……改めてご紹介致します。この方は私めの主、イリア様にございます」

「……」

青い髪のイリアは、まるで無気力にも見える様子でじつとレナの顔を見ていた。そんな細かいことなど眼中にないようにレナは顔を赤くして目を背けた。

「いや困るなあ、そんなに見つめられちゃ目のやり場が……」

「お前、名は？」

ようやく出したイリアの声もやはり、静かを通り越してどこか生氣を失っているようであった。

しかしレナにはそれも関係ない。彼は鼻水を垂らしながらビシッと元気よく名乗った。

「オレは旅人のレナです！ 世界を巡って色んなものを探しています！ さぶっ」

「レナ。あなたは世界のことをたくさん知っているのか？」

「そりゃもう、旅人ですから！ こうして貴女に出会えたのも何か旅の運命だったりとか」

「話してくれ」

「へ」とレナが間抜けな声を出すと、イリアはもう一度言った。

「私に話して……世界のことを聞かせてくれ」

「はあ、それはまあ……でも」

するとレナは、思い立ったように立ち上がって見せた。

「それなら、一緒に行きましょうよ！　一緒に世界を旅しましょう」

「え……」

「というか、なぜお二人共こんな陰湿な場所に？　オレが連れていって」

「レナ殿いけません！」

そしてその足を、一歩どころか飛び込むようにイリアの居る空間へと踏み出した。だがジミが大慌てで叫ぶのも間に合わず、レナの体に違和感が走った。

「いつつ　！？」

「レナッ……！」

……

再びレナは、数刻前に目覚めた時と同じ体制で廃れた天井を見ていた。

「おお、気がつかれましたか」

「ありや……オレは一体？」

自分の体に包帯が巻かれているのに気付き、ゆっくりとレナが起き上がると横には幽霊ジミが控えていた。彼は安心したのか呆れたのか、大きなため息を一つついた（ような仕種をした）。

「申しましたでしょう、あの部屋には立ち入らぬようにと」

「……何だか体が消えてしまいそんな感覚がしたんですが。あのイリアさんは一体？」

「ええ、今からお話致します」

ジミは少しの間を空けると、世間話をするような口調で語り出した。

「レナ殿は魔女というものをご存知ですか？」

「ああ……こつ、箒に跨がって月夜を飛ぶおばあちゃんですよ？」

「うむ、そのイメージは一先ず頭の隅へおやりください。私めが申しましたのは“本物の魔女”です」

ピタリとレナが静止する。

「モノホン？ マジック？」

「左様。イリア様は、魔力を持った魔女であらせられます。それはとてつもない御力を秘められた……」

ジミの紡ぐ言葉にレナは黙ったまま耳を傾けていた。

「ありがちな伝説のようなお話でしょうが、およそ三百年前のこの地方には魔力を持った人間が実在しておりました。イリア様もそんな中から魔女として誕生なされたのですが……」

ジミは語りながらレナの包帯をくるくると取り始めた。

「あの方は生まれながら特別強力な魔力をお持ちでした。元々魔力を持つ人間は危険視される傾向があったこの地方では……イリア様は悪魔のような迫害を受けられたのです」

「……」

「そのためイリア様のご両親は、イリア様を守るため魔法の空間にあの方を封じられました。いかにイリア様の魔力が強くとも解けることのない結界です。そしてそこに近づいた者もみな……」

「こうなると」

自身を指差すレナに幽霊はこくりと相槌を打つ。

「とはいえ、本来であればその程度で済むものではございません。常人であれば一瞬で身体が崩壊するほどの結界なのですが……」

「そこはオレ旅人ですからね、ちょっとやそつとじゃくたばりませんよ！ この前は死にかけましたけど！」

また呆れたように目に苦笑を浮かべるジミにレナは問い掛けた。

「とうとうか……話を聞く限りだと、イリアさんの年齢は、何と言っ
か」

「はい、今年で二百九十七歳になられます」

に「っ……とレナは思わず硬直してしまった。

「老いたわしい方です……三百年もの途方もない月日を私めのよう
な使い魔としか話せず、動くことも出来ず……」

「す、すごおおおおい!!」

今度は何事かと思うような叫び声にジミはビクリとした。

「あああんな美しい女性がさ、三百年も生きて……レアだ！ む
しろ国宝ですよ!!」

「レ、レナ殿？」

「ていうか、ていうか……けっ、結婚したい！ オレ、イリアさん
にプロポーズしてきます!!」

「なっ……お待ちなさいレナ殿！ 何を」

果てしなく謎めいた価値観の旅人は、幽霊も追いつけぬフルスピ
ードで魔女の部屋へと飛んでいった。

……

パンツ、と開かれた扉の前には、先刻その奥に立ち入ろうとした旅人が息をきらせていた。

「あつ……………！」

「イリアさん！……………ダメだつ、やっぱり面とむかうと美しすぎて……………」

レナが一人でクネクネとするのも構わず、再び眠りから目覚めたイリアは焦ったように彼に問い詰めた。

「無事だったのか！？ あなたの体は……………！」

「大丈夫ですよ！ 旅人の体は丈夫に出来てますから！」

イリアは平気そうにニカツと笑ったレナを見て、心底安心した様子を見せた。

「……………どうしたんです？」

「また話しの相手を失ったかと思った……………無事でよかった」

青髪の魔女はフツと、しかしやはり無表情に笑う。

「何十年に一人の客人だから……………死なれると困る」

「そうなんですか……………」

それでそんな人間から色々な話を聞くのが楽しみなのか、とレナは納得した。と同時に自分がそのために助けられたのだという推察に至ると、何かモヤツとしたものが浮かんだ。

「じゃあ、オレが旅の中で見てきた色々なもの話をしてあげます。それしか楽しみがないんでしょう?」

「ああ……そうだ」

ここからは出られないから、という言葉は聞かずに、レナはもう一度焚き付けるようにニカツと笑った。

……

「そしたらね、そこにあつたのは何だと思います?」

「わからん」

「なんと、天国を見ているかのような素晴らしく雄大な景色! 至上の宝なんて噂よりも言葉にならないくらい綺麗だったんですよ!」

「そうか」

レナは感動的な冒険の話の次々に語った。しかしイリアは眉一つ動かすことはなく、壊れた時計のように時折一瞬の反応を示すばかり

りであった。

「……何にも感じないんですか？」

「さあな。わからないから感じようがない」

「透き通るような青い空は？」

「見たことがない」

「じゃあ、美しい空気の香りは？ 森の雄大な緑色も？」

レナが困ったように問い掛けても、イリアは虚しく目を細めるばかりだった。

「そんなものはとうの昔に忘れてしまったのだ。だからレナのような人間が嬉しそうに語っているのを見ると……私も少し幸福になる」

まるで希望というものを端から宿していないような、暗く澄んだ蒼い瞳をレナはじっと見ていた。

「そんなのは偽りです」

「……？」

「綺麗な景色見たいでしょう？ 美味しい食べ物だつて食べてみたいでしょう」

旅人の目は今までの軽薄な雰囲気と違い、イリアを鋭く見通すように光っていた。その眼光を受けた魔女はスツと彼から顔を背ける。

「……望むだけ無駄なことを望みはしない。私をたぶらかすな」

「オレが連れていきますよ」

しかしレナの凜とした声に、彼女はまた振り向いた。

「ここから抜け出したいんでしょう？ 魔女の迫害だってさせません、オレがイリアさんに世界を見せてあげます」

「馬鹿なことを言うな！ それが出来れば」

「旅人つてのはね、挑戦者なんです！ やってみなきゃわからないでしょっ！」

いきり立ったレナは、イリアの結界の中へ再び勢いよくその身を踏み入れた。

「止せ！ やめる馬鹿者！」

「ふぬぐぐぐ……っ！！」

バチバチと電撃のような強烈な痺れがレナの全身に響いた。それは確かに身体が崩壊するかののような凄まじい圧力であった。

「ガッ」

「レナ殿！！」

年老いた男性の声を最期に、レナの意識はまたしてもバチンと途

切れてしまった。

……

「……んあ」

「三日振りですな、無謀な旅人殿」

三度目の覚醒。今までの記憶は夢だったのかと一瞬錯覚するも、体に巻かれた包帯の量が以前より多いことをレナは確認した。

「むう、失敗しましたか」

「失敗も何も……何をなさるおつもりだったのです。魔力に強い体だったから良いもの……」

「いでで……イリアさんをあそこから連れ出してあげるんです。何にも見たことがないって言うから……」

四肢を支えながら起き上がるレナを見て、イリアの使い魔はあたふたした。

「本気だったのですか？ お待ちなさい、あの方はどうやってもあそこから出られないのです！」

「なんでです！ オレっていう第三者がいるんだからなんとかなる

かもしれないでしょう!」

うつ、と詰まるも幽霊は冷静にレナを諭そうとする。

「あなたがいなくなってしまうてはあの方はまた寂しい想いをなさいます。どうか今はイリア様の願いを……」

「イリアさんは世界を見たがってるんです! そんなの気休めですよ!」

「その前にあなたが死んでしまいますぞ!」

その一言が叫ばれると、つかの間魔女の牢獄に静寂が戻った。

「……旅人つてのはね、飯をもらった場所が死ぬべき場所なんです。死んだつて構いやしません」

「し、しかし……」

それに、とレナは包帯を外しながら続ける。

「遅かれ早かれオレが出て行ったら結果は同じでしょう? それじやなんにも変わりません」

……

「……レナ」

イリアは、再び自分の牢獄に訪れた馬鹿な旅人を見て、安心すると同時に何か嫌な気持ちになった。

「三日振りですねイリアさん」

「また馬鹿な真似をしにきたのか」

わざと突き返すように冷たく言い放つても、レナは相変わらず迷いのない笑みを見せる。

「馬鹿はイリアさんの方です」

「何………?」

「こんな気休めで生きてたって面白いわけがないのに、それで満足しようとしてる」

どこかに突き刺さったような彼の言葉に、イリアは凄むような声を返した。

「あなたに何が解るの………」

「わかるわけないでしょ、三百年も生きてる人の心情なんて」

「何だと………おいやめろっ!」

と、レナはイリアの制止も聞かず二度彼女の結界に突っ込んできた。

「ジミ！ レナを止める！ 何をしてる！」

「……」

彼の後ろに静かに佇んでいた使い魔も、迷っているように主から目を逸らした。

「あががが……っ！」

「ッ　　！！」

バチンッ！！

……

「……諦めませんよ……」

三日後、既に見慣れた石天井が目に入ると同時に、もはやミイラ男となったレナは唸った。

「あなたという人は……なぜです？ 三百年、イリア様は死ぬことも叶わずああして生きる事を受け入れられたのです。それを今更……」

「ですから」

満身創痍のレナはゆっくりとベッドから起き上がり、困った様子の幽霊にあの旅人スマイルを見せた。

「あそこから連れ出して、三百年待って良かったって思ってもらってます。絶対諦めませんよ」

「……………」

包帯を懸命に外しながら囚われの魔女を救いに行く男を、黒い影は黙って見送った。

……………

四度目の対峙だった。白い空間に閉じ込められた魔女の青い瞳に映る体は、明らかにボロボロである。

「もう止めろ……………もう余計なことをしないでくれ！」

真剣な表情のレナとは裏腹に、イリアは頭を抱えて俯き首を振った。

「もういいから……………私に嫌な期待を抱かせるな……………！」

三百年、何を知ること何を見ることも、何に期待することも許されなかった。ゆえに彼女は全て忘れようとしたのだ。それを目の

前の人間は、もう一度思い出させようとする。

彼女の激情を前に、命を賭けた男は静かに切り出した。

「スリーサイズ」

「……!？」

「まだ聞いてません。あとプロポーズもしてません。デートだってしてもらってません。一緒にご飯も食べてない」

何かこの場に不釣り合いでありながら、強い想いのこもった彼の言葉にイリアは引きつけられた。

「……イリアさんはどうですか？」

「え……っ!!」

レナはその碧の瞳でしっかりとイリアを見据えたままゆっくりと、しかし力強く彼女に歩み寄った。

「ぐっぎ……い!」

「レ、レナ!」

魔力の渦が彼を襲い始める。三度は耐えた旅人の体もいよいよ限界に達したのか、レナは結界の中で前のめりに倒れ込んでしまった。

「いつ、一緒に……つきましょ……!」

「！」

バチバチと凄まじい力が彼の体を破壊していた。それでも彼は震えながらはいずった。今にも絶命しそうな掠れ震える声で、蒼い瞳の奥へと伝えた。

「世界……み、るんです……いつしよに、わらうんです！」

「レナ！ レナあ！！ あぐっ …！」

「イリア様ツ！！！」

イリアは気付かぬ内に涙を流して彼を見ていた。そして耐え切れず立ち上がって叫ぼうとし、魔女自身も結界に蝕まれた。その様子を見ていたジミが悲鳴のような声を上げる。

「レ、レナッ……！」

「フウ……フウウッ……！」

ガクガクと必死に伸ばそうとするレナの腕を掴もうとしても、結界の重圧はイリアの手を激しく拒もうとした。

「しんじてっ……ばすんだっ……！」

「うっう……！」

いくらのばしても、レナに触れたくても届かなかった。

それがすごく悲しく恐ろしくなり、涙で顔をぐしゃぐしゃにしな

がらイリアは泣き叫んだ。

「い、いやだ……！ いやだっ！ レナアアッ！」

「手をのばせイリアア……！」

バチンッ ドサッ……！

「……………！！！」

イリアの“耳元”で、弱い息が聞こえた。

「はっ……は……」

「う……！！！」

のばしていた手に、そして全身に体温という温かさを感じた瞬間、彼女は顔を上げた。

「……………レナ？」

「はっ……で……でき……まし、た……ね」

しっかりと繋いだ右手は未だに熱がこもっていた。イリアが後ろを振り向くと、三百年間自分が居たはずの空間がぼんやり見えていた。

「イ、イリア様……！」

「で……った……っう」

自身の境遇を意識するや否や、イリアは自分が覆いかぶさっていた人間に再び抱きついた。

「ぐっ……イ、イリアさん……しぬ……」

「うああああん……レ、ナ、ああああっあふっあふっ……！」

三百年分の悲しさと寂しさが一気に爆発したように、魔女は大声で泣き出した。

「レ、ええええナ、あああっ……うううっ……ふううっ、うっ……ひっぐ」

「あう……」

「イ、イリア様！ レナ殿はもはや瀕死の容態です、一刻も早く手当を！」

しかしその余韻に割り込むように使い魔が急ぎ口走ると、幼い子供のような魔女は大慌てでレナを抱え上げた。

「レ、レナッ！ しっかりしろ！」

「ああ……イリアさん、やっぱり……天使だったんですね……」

「いけませんイリア様っ！ 彼は絶命寸前です！」

「お、おいしつかりしろ！ 死ぬな！」

魔女と使い魔は大急ぎで旅人を運んだ。彼が

「むしろ……女神……？」と呟き出した時には、レナの頬はビシビシとひっぱたかれてしまった。

……

「いやあ、こんな短期間に二度も死にかけたのは初めてでしたよ！」

イリアが外へ連れ出された五日後、頑丈な旅人はハツハツと人事の如く笑い声を上げていた。

「馬鹿者……どれだけ心配したと思っているのだ」

「全く……生きているのが奇跡のようですよ」

「そこはほら、旅人ですから運だけは強いんですよ！」

ニカッと馴染みの顔を見せたレナは、彼の脇でずっと手を離さなかつた魔女に目をむけた。

「三百年。待った甲斐あったでしょう？」

「……………ああ」

嬉しくも切なげな表情を見せたイリアは、体だけを起こしたレナにもう一度強く抱きついた。

「ありがとうございます……………つありがとうございます……………レナ。ありがとうございます……………」

「いてっ……………泣いてるんですか？」

「ぐすっ……………三百年振りに泣くのだ、我慢しろっ」

……………

レナとイリアは、旅人の装いで魔女の牢獄の外へ出ていた。雪山は程よく晴れており、まるでたった今誕生したかのような澄み切った世界を照らしていた。

「遭難者の残した装備ですが、ないよりは心強いでしょっ」

「ありがとうございます……………」

「本当にジミさんは行けないんですか？」

しかし主の三百年振りの旅立ちを、使い魔はただ見送ることしかできないのだった。

「私めはイリア様をお守りするために生み出された使い魔……ゆえにこの場所から離れることはできないのです。この身も直に霊界へと還りましょう……」

「……」

ジミは三百年居場所を共にした主の暗い表情を見ると、その魔性の眼をにっこりとさせた。

「さあ、いつてらっしやいませ。あなたの世界です」

「ジミ……ありがとうございます」

「さようならジミさん。食事と包帯、ありがとうございます！」

「レナ殿もまた無理をなさらぬよう。イリア様をお願い致します」

「ええもちろん！ ていうか結婚しますから！ あっ、イリア

さん待って下さいよ！」

ポツ、と音がしたかと思う程に魔女の顔が赤く染まり、二人は白く広がる無限の世界に向かって駆け出していった。

「（お二人とも……どうかお幸せに……）」

「イリアさあん……ス、スリーサイズ教えて下さいっ！」

「ばかっ！……」

レナと一緒に笑うイリアは、世界の全てに期待していた。

世界もまた、そんな彼らを迎えるように光の道を示し始めていた。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8866h/>

イリア

2010年10月15日23時21分発行